

全仏通信

十二月号
発行所 財団法人
全日本仏教会
東京部中央区築地
三ノ一(本願寺四)
電話 〇三二三
振替東京三三〇
発行人 阿部竜
編集者 伊東堅純
印刷所 ルンビニ社

歳末におもう

墓地問題に寄せる関心

阿 部 竜 伝

昭和三十五年三月八日、公衆衛生局環境衛生部長の名で、墓地、埋葬等に関する法律第十三条の解釈について、新たな通達が出されてから既に満三年余、近く満四ヶ年の歳月を迎えようとしている。墓地、埋葬等に関する法律とは言い、宗教上の本質に直結する法第十三条の新通達、而も行政官庁の実に不用意極まる措置によって仏教の歴史を没却して条理を無視し、寺院と檀徒と墓地という相関不可分の慣行を全く度外視した暴挙を敢えてし、これは正しく仏教に対する不当な弾圧であって、断じてゆるすことができない。

東福院住職杉本良智氏を代表原告とする東京地裁での行政事件訴訟は不幸にして敗訴に終わった。然しその内容に於ては数々の有利な成果をかちとった。全日本仏教会においてもこの問題を重視し、直ちに緊急常務理事会を開催してその対応策を議し、高裁に上告することを決して今日に至っている。

法によって黑白を争うとなれば或る程度の年月を要することは又やむを得ないであろうが、地裁での判決理由の中でも述べているように、斯る不用意に発せられた新通達は、不法且つ越権のそしりは免れないであろうと、その越脱した措置を強調されているが、然し最終判決によってその黑白が明かにされるまでは、この不法にして越権の新通達が、行政上の効力を有し、我々はこの不当な一片の通達によって、現実には法上の拘束をうけていられることになる。従って、今尚、寺院墓地への埋葬問題をめぐっての紛争が後を絶たない。実に遺憾であり、寒心に堪えない。

この問題発生当時の全仏理事長は、今の西本願寺総長の太田淳昭先生だった。月に幾回となく役員会を開いてはこの問題の対応策に苦慮、連日のように身を以て陣頭指揮をされた。全仏の参加団体はこの不当な新通達に対する認識を深めると同時に、心から行政官庁

の無宗教ぶりを難し、等しく憤りを感して立ち上った。降りかかった火の子を払うだけの局部的な被害者だけの問題ではなからう。や、もすれば、宗教軽視の昨今の社会風潮に頭をなやめている折り柄、この法律制定以来十三年の長きに亘る法の解釈とその運用を一擲して、卒然と斯の如き通達を出した行政措置に屈することは、やがては第二、第三の暴挙に屈する前提ともなるであろう。全寺院はこの際、この秋こそ、打って一丸となって此の問題の解決に対処すべきである。時の太田理事長は火のような情熱をもやして斗ってくれた姿が、未だに目に見えるよう

だ。その後、理事長も幾度か替った。理事長の交替によって此の問題に対する基本方針が変更されることはあり得ない。法廷斗争によって、その不当な通達を潰破する以外に方途はなからう。従って高裁の判決にすべてをかけているというのが、全仏教徒に与えられた目下の立場である。

それにしても、余りに長すぎると、一つの問題に対する緊張感も二年も三年も同じような状態が続きまわるとは困難だ。高裁の判決まわるといった気分も手伝ってか墓地問題に対する関心が、何にかしら薄れて行くような気がしてならない。今年も亦、未解決の儘で歳を越すことにならう。憂慮に堪えない。

然し我々としては、最後まで鏗先きを納めてはならない。謂はば法の上での戦争である。関心を失ふことはその儘、敗訴に通ずること

とを改めて反省すべきであらう。偶々三重県久居町妙華寺におきた異教徒埋葬拒否事件は、昨年六月二十一日、津の地方裁で、被告妙華寺側が勝訴になったことは新たなケースとして一応注目に価する。その判決全文は全仏通信第八十五号に掲載されているようで、内容に亘って精読されるよう希望してやまない。勝訴にはなつたがその内容については種々と批判もあるようであるが、原告の反訴請求によって問題は名古屋の高裁に移され、既に一、二回の公判が開かれたようである。全仏は、この名古屋高裁での動向についても重大な関心を払いつゝある。

東京高裁といふ、名古屋高裁といふ、その判決如何は仏教寺院八万余ヶ寺にとつては重大問題である筈である。全仏の組織力自体に問題もあると思うが、これだけの問題と四つにくんでいられる仏教側として、余り

南ベトナム救済金
南ベトナム救済金はその後も続々と集って来ていて、十一月十日現在までに全仏国際局あてに次の通り送られて来ている。全仏では御協力下さった各位に対して衷心より御礼申上げると共に、右事件が過般のクイーター成功によって一応解決したもようなので、今後のこれに対する対策については現在サイゴンからローマに向つた中山全仏国際局長の帰国をまつて決めるもようである。
南ベトナム事件救済資金に協

にもその盛り上りに欠けているのは何故か、我々は今一度つよく反省の必要があるのではなからうか。全仏の組織に権威と力があれば、斯うした墓地問題などもおこらずに済んだのではなかつたらうかとさえ思いたくなる。総選挙も終り、新たな局面で、近く特別国会の招集もあると思うが、法廷斗争と併せて大事なことは、矢張り国会議員を通じての国会対策の展開であらう。今回全仏役員任期満了に伴い、新人事の決定と同時に各種の専門委員会の陣容も決定して夫々の部門での権威の方々が顔を揃えられたようで、此の機会を一転機として、法廷斗争と平行して国会対策を確立し、あくまで全仏の組織ある力を發揮して行きたいものと熱願すると同時に、全仏の斯うした運動に、深かい理解と絶大なる協力を切に望むものである。(筆者は全仏常務理事、全仏総務局長)

力の各位芳名
一、金一千円也 一キリスト教徒殿
一、金一千円也 鈴木栄明殿(東京都北区赤羽町一三〇四番地)
一、金一千円也 高橋たね殿(栃木県大田原市寺町一九九五の一番地)
一、金四百円也 京都女子大学生殿
一、金一万円也 大谷喜三郎殿(和歌山県田辺市市会津町大師通り)
一、金五千円也 清陀文浄殿(和歌山県田辺市南新町海蔵寺)
一、金五千円也 橋本恵一殿(和歌山県田辺市福路町)
(次頁五段へ)

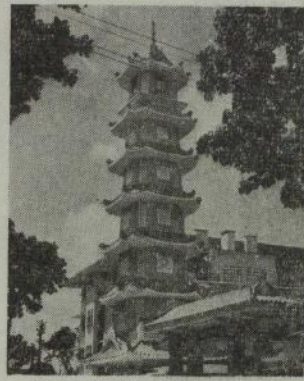
南ベトナム救済金に協

南ベトナム革命成る

サロイ寺院に平和の鐘

追悼法要に中山局長参列

十一月一日の夜半より二日の明方にかけて行われた南ベトナムのクーデターは成功をおさめ、ゴ・ジンジエム大統領一族は遂に滅亡の時を迎えるに到ったが、全仏では既報のとおり、南ベトナムにおける仏教徒弾圧の実情を調査するため、十月三十一日に中山国際局長を空路現地へ派遣したが、中山局長はクーデターの起る四時間前にサイゴンへ到着、クーデターが発生してからは駐南ベトナム日本大使館に避難したと云う情報が入った。中山師は十一月六日までサイゴンに滞在し、実情を調査し関係者とも会談し、その後はカルカッタ、マドラスを経由してコロンボに入り其処からローマへ向い、ヴァチカンで法皇パウロ六世に謁見して南ベトナムにおける視察の要を報告すると共に世界平和についても会談する。



サイゴン市のサロイパゴダ

協会の主催でサロイ寺院で行われた七人の焼身自殺僧に対する追悼慰霊法要に日本仏教代表として参列し、寺院をうづめた一千名以上の参列者の熱烈な歓迎を受け説経廻向した。寺院正面の歓迎アーチには「歓迎日本仏教代表」と大書したノボリが立てられてあり、終ってティッチ・クワン・ドク師が焼身自殺した路上に座って多数の仏教徒と共に同師の冥福を祈り

なご中山国際局長より十一月七日全仏にどいた電報によると、「クーデターによりベトナム仏教の危機去り一同喜ぶ。留学僧は無事ロッヂ大使に会見す。十一月十二日にパンコックを経由してローマへ向い、法皇に会見の予定である」とのことである。

なご中山局長よりこのほど全仏

あてに次のような通信が寄せられた。

拜啓 前略。十一月一日朝サイゴンに着きました。午後になると市内に砲声が轟きクーデターが発生し、夜明けまで激しい戦闘が続き一寸恐ろしい状態になりましたが、朝日と共に勝敗は決まり、国民怨嗟の的のゴ政権は完全に潰えました。早速サロイ寺院に参りましたが、釈放された僧侶や信徒を迎えて大変な賑わいを見せていました。私共は祝賀一番乗りと云った形で人気の中心でした。事件発生地ユエ市にも行きましたがその弾圧の実状は恐ろし、解放者を迎えての十万人デモは盛んなものでした。十一月十一日にはサイゴンの陸軍病院に革命戦の負傷兵を見舞い、グエン・ゴク・トー首相やドン・パン・ミン中将とも会話し日本仏教徒の総意を代表して挨拶懇談しました。なお本日の便で空路インドを経てローマに向います。御一同様の御健康を祈ります。

中山師の話では二日の午後三時三十分から町の統制はとれたとのことであった。私は三日に中山師と共にサロイ寺院へ行つたが寺の前は全たくお祭り気分が多数の信者から大歓迎をうけ本堂で七人の焼身比丘の冥福を祈り阿弥陀経を唱えたが、革命前は生死不明と噂されていたトムザツク師やタンケム師らとも合い身の安全と再会を喜び合った。両師は八月二十日に秘密警察により逮捕され九月二日に釈放されたとのことです。五日には再びサロイ寺院へ行き犠牲者の追悼法要を営み、ティッチ・クワン・ドク師の焼身供養をした市の目抜き通り(フアン・ディン・フング通り)で合掌説経をなした。昼には釈放された僧侶の招きでサロイ寺院で歓迎昼食会に参じ、ゴ政権の軍隊による詮問の實際をきいた。七日にはユエに行きゴ大統領の弟ゴ・ジン・カン邸に向つたが激高した民衆は同邸を破壊していた。この大邸宅の裏山には多数の逮捕者を監禁していたが、色々話をおびたたく残っていたが、色々話を聞かされ背筋にためたものが走る思いがした。

- 南ベトナム仏教徒はゴ政権の施政に不満のあまり、むしろベトナムに協力的であったと見ることも出来るほどで、ゴ政権が崩壊した今日では民衆の総意をになつた革命軍事内閣に対し仏教徒が協力するのは明瞭であり、新政府としては対ベトナム戦は前よりもやり易くなつたと見るべきだろう。と語つているが、南ベトナムの対ベトナム掃蕩作戦は仲々至難のようだと見るべきだろう。
- 一、金参百円也 飛鳥勲殿(大阪市山形製綿所内)
 - 一、金五千円也 大田仏教会殿(鳥根県大田市大田町法蔵寺内)
 - 一、金五千四百六円也 鳥根県仏教徒会議殿(鳥根県浜田市原町光西寺内)
 - 一、金六千円也 世界仏教協会従業員一同殿(東京都港区芝公園五号地)
 - 一、金一万四千八百円也 臨済宗方広寺派宗務本院殿(静岡県引佐郡奥山)
 - 一、金五万円也 神奈川県下寺院一同殿(横浜市南区中村町玉泉寺内)但しこの中金一万円也は柿沼信道師(同県足柄上郡中井村泰翁寺)分

中山局長と同行した山中竜淵師(仏教タイムス社)は去る十三日一足先きに帰国し、十五日午後一時から東京神田の神田寺会議室で帰国報告会を開催し、席上大要次のように述べた。

私は都合で中山局長より一足遅れて革命直後のサイゴンへ入った。中山局長はすでに十一月一日午前八時五十分サイゴンへ到着していた。私は三日夕刻五時にサイゴンへ着き直ちに日本大使館へ向つたが、町の所々でクスブル車両は見られたが一般に町は平靜であつた。

十月九日より欧米各国を歴訪され宗教、教育等を視察中であつた訓覇全仏理事長は、さる十五日午後九時四十分着のSAS航空で出雲路大谷派宗務所組織部次長を滞同無事帰国された。

当日は羽田空港へ大谷派僧俗関係者多数が出迎えたが、全仏から柳国際部長が出迎いた。なお訓覇理事長は翌十六日午後八時東京駅発の第一富士で京都東本願寺へ帰り、十二月三日開催の常務理事会に出席諸報告をすることになつてゐる。

訓覇理事長帰国

欧米視察旅行中の

中華人民共和国の仏教

— 鑑真大師の記念行事に参加して —

柳 了 堅

今回は中国仏教協会をはじめ各種団体等で結成されている在北京市鑑真和尚逝世一千二百年記念籌備委員会の招請に応じ、金剛秀一常務理事を団長とする各宗派九名の方々とともに秘書長として訪中する機会を与えられたことを心から感謝いたしておるものであります。

私共日本仏教代表団一行は、九月二十七日羽田空港を出発し、香港に前後三日間滞在し、中国では二十五日間に渡り広州、北京、西安、上海、杭州、南京、揚州、肇慶等の各主要都市を廻り、中国仏教界の現状と、寺院活動の實際に触れることが出来ました。

また、十月一日の国慶節及び南ベトナム仏教徒迫害事件に関してアジア十一ヶ国仏教徒会議にも出席し、世界の仏教徒に告ぐるの書も日本代表の線に副ったものが採択されほんとうに良かったと思えます。

こうして各都市における大法要記念集会、揚州での記念堂献入式肇慶慶雲寺の栄教法師記念碑除幕式をはじめアジア仏教徒会議等、連日忙しい日程を過ぎ、十月二十四日無事帰国しましたが、そのうち特に関心を持っていた中国の仏教の現状についてその大要を御報告申し上げます。

中国における宗教は、仏教、道教、キリスト教、天主教、イスラ

ム教であるがそのうち仏教徒が最も多く一億と云われております。

解放前は、宗派別の団体があったようですが、現在は縦のつながりがなくなり中国仏教協会一本に統一されております。中国仏教協会は、省および市単位の仏教協会によって構成されて



日中共同声明の署名する
左が金剛団長右が趙樸初居士

本部は北京の広済寺にあり、会長は趙樸初（青海省副省長）副会長は趙樸初、周叔迦等の居士および巨賈、阿旺等の法師など十名おりそれが各民族を代表しよくバランスがとれております。

常務理事は約三十名、理事は約二百名全国から選出され、すべて僧俗一体をなしております。

事業の主なるものは、仏学院の経営と南京の金陵刻經処のほかにいろいろな仕事をしております。また我が国における衆議院の性格をもつ人民代表大会に議席をもつものは趙副会長をはじめ七名、参議院に相当する政治協商會議の委員は周叔迦居士、巨賈法師等約三十名いることであつた。

これらはいずれも仏教界から選ばれた職能代表であります。地方においても省や市の仏教協會長、秘書長クラスはいずれも地方の人民代表に席をもつていろいろと活動しているように見られました。

また、国家机关における宗教事務は、國務院においては宗教事務局、省および市においてもそれぞれ宗教事務局があつて宗教の事務を扱つていて私達一行の滞在中も各地とも大へんな世話をしてくれたのであります。

このように中国における宗教は憲法に示された信教の自由を立前としていたが、名刹の修理や、仏牙等の塔などには数億円の補助が行われており、各寺院に対し十分保護、育成の手がさしのべられていくように見受けられました。

このように中国の仏教は、国の繁栄とともに益々強固なものになるであろうことを確信するものであります。ただ感ぜられること、やはり仏教の近代化と若い層に対する伝道方策を樹立しなければ「文化財」としての仏教に留る懸念が十二分にあることが感ぜられました。（筆者は全仏国際部長）

（なお訪中日本仏教代表団の報告書は目下作成中であり、十二月末完成されるもようである。）

揚州法浄寺の鍍入れ式

中 濃 教 篤

われわれ訪中日本仏教代表団は十月十五日、鑑真和尚の生れ故郷である揚州の法浄寺（昔の大明寺）で行われた奈良唐招提寺の金堂を模した大堂建築のための鍍入れ式に参列した。

ここは南京から自動車で三、四時間の辺地で、唐代には日本との交流で繁えたところである。ところでこの鍍入れ式には不思議なことが起つた。それは、われわれ代表団が中国滞在中一日も降らなかつた雨に朝から降られ、鍍入れ式を行う頃にはその強さが増したことである。金剛団長も大西長老もこの雨に打たれたがら一鍍づつ土を掘り起こすという仕儀となつたが、中国の趙樸初居士もわれわれも式が終つてズブ濡れの顔や着物を拭きながら、「これをしも法雨といふべきであらう。鑑真和尚がおよるごびになつていくからだ」と語りあつた。ここに日本



揚州の鑑真堂鍍入れ式で左端金剛団長
その右大西長老

から逆輸入された唐代の優美な建築が建てられた姿を想像し、その「天平の甕」が雨に濡れた様子を考えるとたまらなく嬉しかった。すでに設計の青写真も出来上り工事にかゝるばかりになつていて明年中には完成のつもりであると聞いた。

この鍍入れ式を終え、大雄宝殿（本堂）の石段を降りると、そこに常盤大定博士が建てられた記念碑があつた。大正年間のこの石碑も雨がかかり、常盤博士が、この大雄宝殿の前に起つた、鑑真和尚を偲ばれている姿が眼に浮ぶような気がした。

千二百数十年の昔、鑑真和尚はこの寺で修行されたが、その遠い昔を偲ぶには非常にふさわしい雨であり、山を背した法浄寺の建築である。またこの平山堂がかの有名な詩人蘇東坡の住したところであることもその感を深くした。（訪中日本仏教代表団副秘書長）

高階瓊仙禅師ら帰国

核兵器禁止を訴えるためローマ法皇庁を訪れパウロ六世に接見しその後欧米各地を歴訪していた核禁平和使節団一行は、数々の成果をあげて先般帰国したが、一行の中の高階瓊仙全仏会長及同秘書長佐瀬淳光師らは帰路行動を別にし米国からハワイに渡り各地を巡錫していたが、去る十月三十日午後六時四十五分羽田着の日航機にて帰国した。

全仏から麻布照海事務総長、金剛秀一常務理事など多数が迎えられた。

鑑真和尚慶讃訪中日本仏教代表団 中国仏教協会

共同声明

鑑真和尚慶讃訪中日本仏教代表団と中国仏教協会は、鑑真和尚が示された弘法不屈の精神を発揚し仏陀の慈光に照らされつつ、現代において如來の誓願とともに奉持し、仏日を増輝し、法輪を常転せしめ兩國間の恒久平和と友好確立のために精進する。このため双方は次の諸項について合意に達した。

一、一千二百余年前における鑑真和尚の日中兩國の仏教交流に対する偉大な功績を現代に生かすため双方は鑑真和尚の遺徳を顕彰する事業をより一層推進し和尚の行願をうけ継ぎ、日中兩國の永遠の不戦と世々代々の友好のため精進する。

盛大に行われた

鑑真和尚上奉賛の集い

鑑真和尚の遺徳を奉賛する集いは本年五月頃より全国各地において開催され多大の成果をおさめて来ているが、鑑真和尚上遺徳奉賛会(東京都文京区富坂町伝通院内)と東京仏教団(采馬道断理事長)では全仏協賛のもとに十一月九日午後一時より東京浅草本願寺の大谷ホールにおいて約三百名が出席して盛大なる「鑑真和尚上奉賛の集

偉業を尊重し、その遺産を護持していることに對し、敬服と感謝の意を表する。双方は鑑真和尚に關する文物資料の研究と交換をひき続きおこなう。

三、日本仏教代表団は中国仏教協会が鑑真和尚を日本へ招聘するためあらゆる困難をたえ忍んだ日本僧榮叔、普照兩法師の遺徳を讃えられていることに感謝の意を表する。双方はこの兩法師の顯彰をひきつづきおこなう。四、日中兩國仏教徒の交流を恒常化するため、相互の仏教徒が提携して、兩國の仏教交流および人民の友好に貢献せられた求法弘法の各宗の祖師先徳の功績を顕彰する。

一九六三年十月十五日
於揚州
鑑真和尚慶讃
訪中日本仏教代表団
金剛秀一
中国仏教協会
趙樸初

い」を開催した。

第一部の慶賀大法要は浅草本願寺輪番末広愛邦師が導師となり、一山総出仕で厳かにとり行われ、ついで関東詠歌連盟による鑑真和尚上奉賛御詠歌が奉納されたが、第二部では過般中華人民共和國から帰国した訪中日本仏教代表団々々長金剛秀一師による帰国報告がなされ、また文化界代表として中国へ渡った「天平の薨」の作者井上靖氏、中国へ贈った鑑真像の作者本郷新氏並びに「天平の薨」の主演者の河原崎長十郎氏らによる講演

がなされ盛會であつた。

タイ仏教会の意向

第七回大会インドで開催か

全仏では局内會議の了承に基づき、世界仏教徒連盟本部(WFB)のラングーンよりベッコクへ移動に關するWFB本部の批准に對し、在バンコック WFB新會長ブーン妃あてに過日電文により、「承諾した」旨を通報した。

なおタイ仏教会副會長アイニム・サンガヴァン氏よりの來信によると、同氏は第七回世界仏教徒會議を明年インドで開催する意志のあることを非公式に表明しているが明年九月中旬を期して開かれるアナガリカ・ダンマペーラ師生誕百年記念祭と同時にWFB大会を持つと云う主旨であり、全仏ではこれについて中山國際局長が帰国した上で協議する予定である。

岡山笠井山に 親善の大仏

駐日ビルマ大使を迎えて開眼式

日本とビルマ兩國親善を記念して建立された大仏(文化財保護専門委員香取正彦氏製作)の開眼供養式典が去る十月八日午前十時から岡山市笠井山の大仏殿においてウ・トン・シエン駐日ビルマ大使三木岡山県知事ら關係者五百名が参加して盛大に営まれた。

大仏殿には三木知事がビルマより持ち帰った土とビルマで戦死した同県出身の戦没者五千柱が納められており、毎月八日を例祭日として一般公開され、四月と十月の八日には大祭が開かれる。

神奈川県仏役員会

多彩な活動をつづけている神奈川県仏教会(會長高橋隆天師)では十一月十三日午前十一時より玉泉寺において県内宗務機關代表および支部長の合同會議を行い懸案の事項について協議が行われた。

全仏から柳國際部長が出席し、南ベトナム問題と中国からの帰国の報告を行い、県下寺院から献金された南ベトナム仏教徒への救援金五万円がおくられた。また東京仏教団墓地対策委員会より杉本、林兩常務が出席し同問題について種々協議打合せを行った。

当日は高橋隆天會長はじめ副會長、各常務理事、各支部長、各宗代表三十数名が出席、盛會裡に午後三時終了した。

創価学会の不当性をつく

「創対連タイムス」について

創価学会に對する反撃とこれが根絶を目的とした団体は多いが、これに「創対連タイムス」(責任者鹿内敬之助氏)なる新聞を紹介したい。

創対連タイムスは創価学会の弊害を一つの社會問題として取上げ世の公秩良俗の上からその不当性をたたいている。その趣旨とする所は、①一人でも多く、一刻も早く学会員を悪夢から目覚めしめる②学会の実態を世に知らせる是非を問う。③それがとりもなおさず宗教の獨善性を反省せしめて健全な民主主義を擁護することである。としている。要するに、宗教生活と云うもの大して関心のな一市民が自分の周辺で日常見た

り聞いたりする獨善的宗教のやり方に對して黙っていられないと云うところから、この新聞が発行される点に特に重大な意義があると云える。

日本仏教保育協会の

年次總會並に研究集會

日本仏教保育協會では、私立園にとつて重大な關係をもつ、保育行政強化問題を中心に、十月二十九日、三十日の両日に亘り、静岡市において年次總會並に研究集會を開催した。先づ、二十九日は、午前十時より常任理事會を開き、總會並に集會の運営方針を審議し、午後一時半より總會に入つた。總會は會長大谷光昭師の開會挨拶に続いて、全仏組織局長二宮清海師(代理)の祝辭について議事に入つた。議事のうち特に重要な事項は、次の如きものであつた。

一、事務報告 古屋理事長

二、決算、並に予算案報告

三、第八回(明年度)仏保大会開催の件

四、研究集會テーマ案について

五、私立幼稚園の保育行政強化問題について

等であつたが、第三議題の明年度仏保大会は、来年八月七、八日長野市善光寺において開催が決定し第五案の要旨は「宗教法入立幼稚園、保育園を恒久施設として認めよ」というもので、現在、法務大臣賀屋典宣師を會長として、日本宗教保育事業協議會によつて、強力に政府機關に運動を展開している。

顧問、参与、各専門委員委嘱

南ベトナム問題も正式受入れ

第一回全仏 常務理事会で決定

全仏役員改選後初の常務理事会は十月二十六日午前十時半より真言宗豊山派宗務庁(東京文京区大塚坂下町)において開催され次のとおり決定された。

一、議案

- (1) 顧問、参与推薦に関する件
- (2) 専門委員会委員委嘱に関する件
- (3) 南ベトナム問題に関する件
- (4) インド救済事業後援会に関する件
- (5) 聖書贈呈に関する件
- (6) 墓地問題に関する件

二、追加議案

- (1) 国会対策に関する件
- (2) 未加盟団体加入勧誘の件
- (3) 原爆被害者完全援護法成立運動に関する件
- (4) 仏教音楽研究会第八回演奏会の件
- (5) 核禁宗平使節団帰国報告大講演会開催につき、後援方申し入れに関する件
- (6) 不良マスコミ関係物取締方につき、映倫等関係方面申し入れに関する件

三、決議事項

議長に理事長職務代行平林有高師就く。署名委員に金剛秀一、上野頼栄両師を指名。全員これを了承。案議に入る。第一議案上程。総務局長より当局案を説明。左記

原案通り決定。

顧問—宮本正尊・小野清一郎・大谷光昭・古川大航・大谷光暢・清水谷恭順・石橋湛山・岸信宏・推尾弁臣・正力松太郎・鶴昌清・長井真琴・増田日遠・松村謙三・山田日真

参与—赤松常子・安藤寛・大谷賛雄・大村仁道・北畠教真・川野三暎・草葉隆円・小柳牧衛・中野文門・佐々木泰翁・田中栄一・前田義雄・友松円諦・渡辺真海・白石山亮一・狩野獲麟・栗田俊道・石川存静・小笠原義雄・佐瀬淳光

第二議案上程。総務局長より当局案説明。原案一部修正し決定(別記)。但し、一部増減を認める

第三議案上程。国際局長より説明。「南ベトナム問題仏教徒協議会」からの全仏吸収申し入れの件は受け入れる事に決定。但し、全仏の立場を明確にする。国際局長を現地調査のため派遣する。同協議会ですぐに集金した残金は寄託を受け保管する

第四議案上程。国際局長より主旨説明。インド救済運動を通じて、日印の親善を深める主旨については全面的に賛成、尚、全仏が募金運動することについては、今後検討する

第五議案上程。総務局長より経過説明。聖書贈呈の日本における事務連絡責任者都田恒太郎氏と理

事長(或は代表者)が会見し、真意を確かめることで了承。

第六議案上程。組織部長より説明。妙華寺に關し、昭和三十八年八月二十八日京都に於ける宗務総長会議に於いて、協力は約したが正式な議題として取り上げたものではない。又、経済的援助を確約する称な事は全然ない。しかし簡単に断るという事はできないので訴訟上における協力を(要請に応じては全仏の顧問弁護士と斡旋連絡等)応援をし、見舞金(額未定)を出すことを了承決定。見舞金の件は今回の妙華寺(三重県)の場合のみで今後惹起したこの種の問題に關しては、その都度局内及び墓地対策連絡会に於いて協議処理する。

追加議案上程

国会対策に関する件—組織部長説明。(墓地問題)墓地対策連絡会の方から積極的の働きかけ、一人でも多く協力議員を獲得し、連絡を密にして政治的解決を計るよう協力を求めること。(今回の選挙対策)立候補者名簿を検討して仏教系候補者に対しては、激励電報を打ち、近隣の候補者については、激励文(ポスター)等を送るその人選その他細部に関しては当局一任

未加盟団体の加入勧誘の件—組織部長説明。北海道等県仏の組織の確立してないところは、市仏教会の加盟を認める。但し、群小の諸団体の加盟に關しては、特に積極的の働きかけない。

原爆被害者完全援護法成立運動に協力の件(第五追加議案と共通がある)ので一括審議に附す—核禁宗平使節団帰国報告講演会開催

の件については、後援の名義を与えることを許可。第三号議案については、個人の参加及び署名運動は随意であるが、全仏としては(1)三十日の社会事業会館に於ける大会には出席しない。(2)署名運動を特に参加各団体に呼びかけることはいない。(3)会長メッセージは送らない。ことを了承決定。

仏教音楽研究会第八回演奏会に協力の件—例年通り、会長メッセージを送り、協賛金(例年参千円也)を支出す。

不良マスコミ関係物取締方につき映倫等関係方面申し入れに關する件—文化専門委員会に諮問し、具体的強力的措置をとる。尚、この問題の資料は、全国青少年協議会より協力を仰ぐことを了承。更に、左の四議案が追加上程され、審議された。

一、鑑真和上奉贊の集い協力の件—協賛の件を了承決定。

二、インド古代美術展観覧方依頼の件—仏教美術に深い関係があり、了承。

三、訪中仏教代表団の鑑真和尚慶讃に關する日中仏教共同声明書およびアジア十一カ国仏教徒會議の世界の仏教徒に告ぐの書(全仏通信十二月号掲載)發表の件—中国に於いて調印された共同声明書について、代表団秘書長柳国際部長より發表され了承された

四、オリビック前年祭出席の件—理事長職務代行平林師が出席することを決定。

- 議長 平林有高
- 署名委員 金剛秀一、上野頼栄
- 出席者 十一名(含委任者)
- 平林有高、阿部電伝、阿部清海、二宮清海、金剛秀一、田丸道忍、田丸道忍
- 平林有高、阿部電伝、阿部清海、二宮清海、金剛秀一、田丸道忍、田丸道忍
- 平林有高、阿部電伝、阿部清海、二宮清海、金剛秀一、田丸道忍、田丸道忍

総務委員会委員(十五名)

- ◎長野隆法、◎小野塚潤澄、◎新谷寛広、井上恵行、小沢照禧、木村智広、下宮高俊、神野真一、藤原俊、谷堯昭、松村寿頭、源玄英、吉井淨仙、山本芳遵、吉本道観

組織委員会委員(三十名)

- ◎栗本俊道、◎狩野獲麟、◎杉本良智、◎石上慈範、浅井仏宗、和泉得成、鈴木憲敬、北之内真竜、久保延太清、熊野竜夫、小宮勝憲、桜井文隆、椎谷健、白川良純、関岡賢一、富田道敷、仲田順和、新美孝道、能登有兆、林静寛、船口暉子、古屋道雄、三沢智雄、茂田井教孝、森芳俊、山田貫詔、吉田敬直、桜井秀雄、米山久、大河内隆弘

国際委員会委員(二十三名)

- ◎久保正文、◎赤松常子、◎藤井真水、石川存静、井上真六、今井大彰、岡野貴美子、上村真肇、川田聖見、小谷徳水、阪口祐瑞、菅原恵慶、滝照道、永田正義、橋本照稔、古坂明詮、村野宣忠、山田一真、壬生照順、J・Rブリソクリ、小谷淡雲、五島行宣、三明永無

文化委員会委員(二十四名)

- ◎松本徳明、◎伊藤道機、◎白石亮一、◎真溪義尚、浅井堅教、石橋益恵、内山憲尚、雲藤義道、金岡秀友、紀野一義、塩入亮達、西義雄、西沢はる、増永靈鳳、摩尼清之、早島鏡正、峰岸応哉、権藤円立、伊藤完夫、西村輝成、常光浩然、竹中素仁、長田恒雄、大島忠雄、細川量雄

注◎印は委員長、○印は副委員長

大任を果して帰国

訪中代表団歓迎会開く

鑑真和上の逝世一千二百年を記念する催しが中国各地で行われるため、日本仏教界においても、日本仏教に戒律を移入した大恩人鑑真和上の記念行事に参加するため、一行九名が日本仏教界代表として、九月二十七日羽田発日航機で出発したのであるが、金剛秀一団長を中心として一行九名は、各地の行事に参加し、一ヶ月の巡錫を終えて、十月二十四日無事帰国した。

この間、中華人民共和国の鑑真和上逝世一千二百年記念準備委員会の主催する記念行事、或は揚州に建立される記念寺院の竣工式、更に十月一日の国慶節の祝典に参列する等、仏教を通じて、日中兩國の親善につとめた。

歓迎会は十月二十五日午後五時より、東京音羽の直言宗豊山派宗務庁講堂で開かれたが、参加者は凡そ百名で、和やかなうちにも大任を果して無事帰国した一行九名を歓迎するにふさわしく盛況であった。その模様は概ね次のようなものであった。

午後五時三十分開会、一同着席全仏事務局長麻布照海師より、開会並に歓迎の辞があり、次いで川越喜多院貫主、塩入亮忠先生主唱による三師礼文の斉唱について訪中使節団々長金剛秀一師より全仏理事長代理平林宥高師に対して、団旗返還式が行われ、続いて使節団が中国より受領した各種土産品の目録の披露があり、万場の拍手

により受理された。

続いて、全仏理事長代理平林宥高師、鑑真和上遺徳奉賛会理事長大河内隆弘師、及び東京仏教団理事長長来馬道断師より夫々歓迎のことばがべられた。これに対して、使節団を代表して金剛秀一師より挨拶並に謝辞があり、引続き秘書長として参加した全仏国際部長、柳了堅師より、一ヶ月にわたる使節団の事務報告が行われた。

次いで、祝盃に移り、祝盃中に使節団一行が夫々一人づつ、各自の挨拶及び、所感を述べたのであるが、さすがにベテランの各師から述べられた所感には、新しい中国及び、中国仏教界の概要について聞くべき多くのものがあった。最後に、全仏総務局長阿部竜伝師より閉会の辞があり、無事終了した。

百五十名を推薦

全仏組織局長ら激励に飛び廻る

全仏組織局では十一月二十一日の衆議院議員総選挙を前にして、全仏加盟各団体からの推薦を仰いで総計一五〇名の仏教系立候補者に対し会長名による推薦状と、全仏名による必勝を祈念する立ビラ並びに激励電報を送った。なお都内近郊の各候補の選挙事務所へは二ノ宮組織局長、岩本部長らが挨拶廻りを行った。

仏教界 ニ ュ ー ス

◎浄土真宗本願寺派では昨年度可学駐在の施行を決めていたが、このほど①担当地区の各教区教務所と連絡をとりつつ、組単位の教務関係の講習会を開く。②担当地区内の関係学校の教職員を対象として、親鸞とその思想を理解させる活動を行う。③担当地区内の国立公立大学の教職員、学生に働きかけて、親鸞とその思想を研究するサークルの結成をすすめる、等に努めることにした。そこで初年度として九州・北陸の両地区に可学を駐在させ、両地区内の宗門関係学校の教職員と、国立、公立大学の教職員、学生に呼びかけて親鸞研究のサークルを結成させることにした。こうした働きかけは同派で発起させた親鸞聖人讃仰会がすでに主要都市で親鸞に関する講演会を開き親鸞精神の宣揚に努めているが、こうした運動をさらに推進しようというわけである。

◎京都の真言宗泉涌寺派本山泉涌寺で十月二十日洛東仏教青年会の発会式が行なわれた。会の活動としては、①読書会(仏教入門書の輪読会、現代と宗教についての検討・参禅会等)、②古美術研究会(社寺見学、古美術観賞)、③コーラス部(ポピュラーソング、仏教聖歌等)で泉涌寺即成寺を会場とし、十六才以上の高校生、大学生、勤学青年の男女を中心に、泉涌寺、今熊野周辺をはじめ、市内外にも働きかける。◎富士大石寺を中心とする日蓮正宗創価学会の進出している折柄、身延山を根本とする日蓮宗をはじめ、既成の頭本法華宗、本門法華宗、日蓮正宗、日蓮宗不受不施派・法華宗(本門流・陣門流・真門流)・本門仏立宗・国柱会・日本山妙法寺大僧伽の十一教団が、十一月二十八日身延山西谷の祖廟に於て、「日蓮聖人門下連合会」の発会式を挙げることにした。この連合会は身延山の祖廟を中心にして、門下各派及び教団の連絡、協力、団結を強化することを目的とし、祖廟護持の組織拡大、教育事業の提携、布教の連合戦線の展開研究、協議、親睦機関の共同化等を行なうことになっている。理事長には日蓮宗の金子宗務総長が選出された。

◎真宗大谷派の福井教区では、このほど福井テレビと話がまとまり九月一日から三ヶ月間、毎週日曜日の午前七時十五分から十五分間観経序分の問題につき質問形式で前後十三回にわたって放送されることになった。

◎高野山真言宗では、四十一年の開創大法会を記念して高野山にある高野山大学の分校を大阪府河内長野市近郊に建設する方針を強めたこの分校は、現在、密教、仏教、人文の各科を主体として経済、経営、商学の各科を開設するほか女子短大をも併設する意向である。

新刊紹介

一、創価学会の批判的解明
本書は創価学会の実体調査に基づき、学会内部の組織及び現況を解剖し、その教義を痛烈に批判している。
(定価一部二百円也送料共)

二、寺院の新しい社会教育活動
仏教寺院の近代的感覚による布教方法や、寺院の社会活動の新方策のポイントを指摘しており、現代寺院の経営方法等の資料として非常に有益である。
(一部百四十也送料共)

いずれも申込みは全仏組織局あて

禅研究の外人より依頼

禪研究のため来日したいから便宜を与えられたいという依頼がフランス人ダニエル・クログニエル氏(25才)と、米国人ヘルマン・コース氏(35才)より全仏国際局へ来ている。同局ではなるべく依頼者の意に沿うよう努めるとしている。

加盟団体住所変更

◎朝日生命仏教研究会では、朝日生命本社移転にともない左記へ移転した。
東京都新宿区角管二の一〇三
朝日生命本社内(362)三一一一

基督教に対する仏教者の態度(上)

以下の論文は在ハワイ州ホノルル市真宗教会開教使ローランド竜口師が、在米仏教開教使の為に英語で書かれたものである。日本の仏教僧侶や仏教徒にとっても、示唆に富むものであると思うので此処に意訳したものを掲載したい。なお訳者松澤弘道師は元全仏国際局主事で目下ハワイの浄土宗別院で布教に従事している

第一章 序 説

現 今の仏教開教使は屢々自己本来の宗教伝統と異なる西洋文化の侮り難い攻勢に直面している。一般の人々は往々にして開教使も人間であり、過失を犯す事を忘れてはならない。開教使は自分の時間を割いて迄も献身的に寺の雑事に従事し、その分散した労力は屢々本来の開教事業に専念出来なくしている。米国の土壌での異質的伝統の代表者として、仏教開教使は屢々少数派の不名誉を甘んじなければならず、その信仰信念は時折攻撃的な人々の折伏を受ける。彼等の中には、仏教を何等精神的に価値無き宗教として蔑視する者すら居り、その巧妙な議論は屢々開教使を言葉の網で捕め落す。此等狭量なる人々は論理的矛盾が精神的矛盾と同一でない事を忘れているのである。或る者は仏教は単なる哲学にすぎず、それは一個人の創作なるが故に神の直接啓示ではないとし、又或る者はそれは初步的心理学にすぎず、何等宗教的特質を持たないものだとしている。此等の非難は直截な大乘の度量と明快な論理で対応しなければならぬ。開教使の或る種の質問に対する無言の沈黙は時によると無智

と間違えられ、強いて答えると、その言葉は矛盾に陥入る。此の事実は何も開教使の地位を低下させるものでもなく、ましてや人間として失墜する訳でもない。此等仏教開教使の在り方を再検討し、その無防備に等しい状態に対処する為に此の小論をしたためるものである。

人間のあく事なき幸福追求、安心立命の為の闘いは、医学、生理学、社会科学を進展させ、それ等は過去の迷信迷信等を不要なものとした。これはむしろ喜ぶべき事である。これは必然的に我々の問題にかかってくる。即ち宗教を比較する場に於てである。社会や個人がマスメディアや早い通信連絡機関によって異なった文化を知り、我々は他の宗教慣習を無視出来なくなってきた。しかし悲しい事に現在、此の宗教思想の交流は、交互の理解よりも誤解を多く生じた。小人にとっては自分の置かれた環境や遺産を超越して、過去の多くの人々によって培われた真理表現の種々相を雄々しく、又余裕を持って自分の糧としなからである。

今 日程、我々仏教開教使は種々な宗教や宗教者を知る必要に迫られる時はない。我々は仏教徒

として、其等の異なった考えや欲求に直面し、それを仏教教理に関係づける必要がある。真理は不変であり、只その解釈、定義が時代によって異なるのである。又、仏教教理を東洋の遺産としてでなく我々の世代的対話として、現代語で書き換えねばならない。我々には今迄、宗教社会学、宗教心理学や人類学から得られる知識が必要であったにもかかわらず、長らく無視して来た。故に、仏教は知的対称物にすぎなくなり、何等精神的に価値無きものとして見られたのである。今迄仏教は、その難解且つ深遠な形而上学に惑わされて真の生活道として我々に受取難いものとなっていた。こうした状態を我々開教使は無視せず、一日も早く正常の状態に戻さねばならぬ。

西洋に於ける仏教の普及は、西洋人学者、特に基督教宣教師の手にゆだねられて来た。彼等は仏教本来の意味を、ゆがめた概念や教理で表現して来た。これは基督教の伝統に基づいた著作の中に見出され、愛、恩寵救済者、信仰救済、聖者、罪人、義人の王国等はその一例である。仏教術語と等しくされた此等の術語は、問題とする仏教術語のユニークな意味や、独特の味を湾曲する事ははなはだしく、故に仏教術語を英訳するに於て、その意味を限定、分類すべきである。もし、それを行わなければ両宗教の為に不幸な結果をもたらすであろう。我々仏教開教使は、西洋人の心に培われた、此等、術語の記号論理学上の齟齬と不明瞭さの研究実績に直接の責任を持たねばならない。これを怠ら

れば、より多くの害や禍を永遠される事になる。故意の無智、無能は切迫した今日の状態では許されないものである。

比較宗教学上、最も客観的な研究は、ヒューズトン、スミス著の「人間の宗教」である。虚心担懐さを直面目さを以てこの問題に取組もうとする全ての宗教宣教師に推奨出来るものである。この書でスミス博士は、多くの知的な示唆に富む叙述を試みている。其他、鈴木大拙博士の「神秘主義—基督教と仏教に於ける—増谷文雄著の「仏教と基督教の比較研究—N・キャラウエイ著の「日本仏教と基督教」其他がある。亦、此処に読むべき書として、S・H・ケロッグ著の「アジャの光と世界の光」を掲げる。此の書は、その題を見ても分る様に、基督教の仏教に対する偏見に彩られたものであるが、仏教開教使にとっては必読の書である。仏教的伝統のない国に於ける仏教開教使は、仏教教理を書き基督教の狂信的な一面を知り、特に仏教を疑似宗教とする基督教独特の立場に通暁しなければならぬ。

此の小論に於て、如何にこの狂信的な心が、その衝動的な欲求に迫られて、他の宗教よりも優越するとの考えを持つ(実はこれは本当の基督教の立場ではないのであるが)かを少し詳述してみたと思う。仏教開教使は此の立場を承認せずとも、少くとも、創造主としての神の直接啓示に基く、又、字義上では、聖書は神の言であるところの、この基督教の教義的立場を理解しなければならぬ。この考えは彼等にとって「事

実」であり、それ故に彼等に、他の宗教は間違ったものであるとの確信を抱かせるのである。この主張は基督教をして、生ける神の直接啓示であり、唯一絶対の真理の表現であるから、仏教は人間釈迦によって、創作された哲学体系にすぎず、真理追求の単なる憶説にすぎないと云う確信を生む。故に仏教だけでなく、他の宗教も全て間違っていると判断が下されるのである。

仏教徒はいつも自分の意見と異なるか、矛盾した意見に対して、謙虚な気持で聴聞し、仏教の二大原理である。慈悲、智慧にて表現される忍耐、寛容及び熟慮の徳を実行すべきである。

全 式の仏教徒は、相依相関の図式の中に表現される個人差の場と意味が真中に包括されるの信じているから、此の究極的実在に俗世間の異なる立場から、種々な名称を附しているの場である。事実我々の信ずる究極的実在、即ち最高の真理は個人差を超越し、同時に包含する一如の姿である。此の實在に對する基本的な考えを仏教徒は持つが故に、真理は或る特定者や教義や宗教や文化の独占物ではなく、又、その真理は、論理や経験的表現に基かず、我々の内心の直接的直観的体験に基くことと断言出来るのである。真理は言語で絶えず変化し、且つ、基本的には不変なものである。これが一元的な信条に基づき、物の種々相を認める「統合」の根本的立場ではなからうか?真理は生かされるべきものであって、繰返されるべきものではない。それは絶えず変

